

# 情態修飾成分の整理

— 被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察 —

矢 澤 真 人

## 0、目 的

情態修飾成分とは、情態的概念を具有し、被修飾成分の動作・作用あるいは存在などの概念を修飾限定する連用修飾成分のことである。<sup>(1)</sup>

本稿では、この情態修飾成分に対し、その出現位置(順位)や、被修飾成分との呼応などの点から検討を加える。そして、この修飾対象であるところの被修飾成分の動作的概念は、均質不可分のものではなく、いくつかの異質な「相」によって重層的に構成されるといった試案を提起するとともに、この「相」との対応によって、情態修飾成分を分類することを試みる。

## 1、情態修飾成分とは何か

日本語の文法論において、連用修飾成分の内に、情態修飾成分に相当する一類を設ける考えは、山田孝雄(一九〇八)に始まる。

山田は、「語の副詞」を「陳述副詞」・「程度副詞」・「情態副詞」の三種に分けたのであるが、「修飾語」についても、これと対応す

る形で、「陳述の修飾語」・「程度の修飾語」・「情態の修飾語」の三種に分類した。<sup>(2)</sup>

その後、「陳述」と「叙述」との区別や、注釈副詞や限定副詞の設定などにより、山田の「陳述副詞」(一部は「程度副詞」に及ぶ)が検討し直された。そして、「陳述の修飾語」もまた、これに応じて再編されざるを得なかったのである。しかし、「情態の修飾語」については、「同格連用」の一部がこれに組み込まれた他は、ほぼ山田(一九〇八)の「属性に対してなほ委曲に情態をのぶるもの」(P 85)という規定のまま、後の見解にも踏襲されたようである。

副詞の分類から、(文の成分としての)連用修飾成分の分類をめぐす立場を強く打ち出すとともに、従来の見解を集大成したものに、北原保雄(一九八一)の見解がある。

北原は、その連用修飾成分が、いかなる概念を具有するか(つまり、修飾内容は何か)、それがいかなる概念を修飾限定するか(つまり、修飾対象は何か)という基準によって、連用修飾成分を、陳述修飾成分・叙述修飾成分・時の修飾成分・程度修飾成分・情態修飾成分の五つに分類した。このうち、情態修飾成分に関して、

情態修飾成分というのは、その具有する素材概念、つまり修飾内容が、情態的概念である修飾成分のことである。(p 224)

と、従来の見解をうけて規定する一方、

詳細に見れば、動作のどういふ面の情態についての修飾限定であるかによって、情態修飾成分は、更に分類されることになる。(中略)そうではあるが、情態修飾成分は動作的概念がどのような情態のものであるかを修飾限定するものであると総括することができぬ。(p 224 ~ p 225)

と述べ、「動作的概念」という修飾対象の側からも、これが総括し得るものであることを明示している。

## 2、状態相修飾と様態相修飾

今、前述の北原の見解を受けた上で、その下位分類の可能性を考えてみよう。

まず、従来もしばしば試みられたことだが、連用修飾成分の具有する概念、つまり修飾内容の類型化によって分類するという方法が考えられる。例えば、

- ① 風船が ユックリ 大キク フクラム
- ② スミレノ花ガ 小サク アザヤカニ 咲ク
- ③ 非常灯ガ 急ニ 点滅スル

の傍線を付したものは、情態修飾成分と考えられる。このうち、「ユックリ」と「急ニ」とは、「はやさ」の面から、「フクラム」や「点滅スル」を修飾限定し、「大キク」・「小サク」は、「大きさ(体積・面積)」の面から、「アザヤカニ」・「赤ク」は「色彩」の面から、それぞれの被修飾成分を修飾限定するといった分類法である。しか

し、この方法では、類が種々雑多となるばかりでなく、構文論の範囲を逸脱することにもなり、不適当と言わざるを得ない。

もう一つの試みは、情態修飾成分が被修飾成分と結びついたとき、両者がどのような意義結合の関係になるか——すなわち、修飾

II 被修飾の関係構成の型——を見出そうという考えである。

例えば、橋本四郎(一九七五)においては、

④ 雨が ザアザア 降ル

⑤ 昔ヲ ナツカシク 思ウ

⑥ 庭ヲ キレイニ 掃ク

という文のそれぞれの情態修飾成分が、「被修飾語からの属性・内容・結果を抽出した修飾語」(p 159)として区別されている。また、鈴木泰(一九八〇)も、「グルグルト」「グルグルニ」の如く「ト」「ニ」の両語尾をとり得る擬態語の情態副詞の考察において、「ト」語尾による修飾を「過程の修飾」、「ニ」語尾による修飾を「結果の修飾」と呼び、橋本(一九七五)の「属性」と「結果」とに相当する区別がなされている<sup>(4)</sup>。

この「属性(過程)」と「結果」との違いは、山田(一九〇八)においても注目されている。しかし、山田は、これを「修飾語」内の違いとはせず、「従属連用」と「同格連用」との違いとした。今ここで、「従属連用」と「同格連用」とについて詳しく検討する余裕はないが、簡単に言えば、「壁ヲ白ク塗ル」や⑥の「庭ヲキレイニ掃ク」のように、「壁ニ白シ」「庭ニキレイダ」といった関係をもつものは、「塗ル」「掃ク」に従属するのではなく、「二語同一の資格を以て連ねられるゝもの」であり、「相合して一の述語となれるもの」とされて「同格連用」に含まれた。そして、用言に従属す

る「從屬連用」であるところの「修飾語」から除かれていたのである。<sup>(5)</sup>

山田の「同格連用」には、「馬ニテココヲ走り過グ」や「コノ山ハ高ク大キシ」など、今日、連用修飾関係とは認められぬものも含まれるが、連用修飾関係と認められるもの内にも、次の⑦⑧⑨の如く、「結果」という範疇におさまらないものが含まれる。

⑦ 風 スズシク 吹ク

⑧ 水 清ク 流ル

⑨ 夜明ケノ海ガ 白ク 輝ク

⑩ 銅線ヲ 青ク モヤシ実験ヲ 行ウ

⑦・⑧は山田のあげる例であるが、これらは、「吹ク」「流ル」という動作・作用の結果に生じた「風」「水」の情態というより、むしろその動作・作用の最中に、「風」「水」に付与される情態である。⑨・⑩の「白ク」「青ク」も同様、「輝イタ結果」「モヤシタ結果」ではなく、「輝イテイル最中」「モヤシテイル最中」の情態である。

今、仮にこのように動作・作用の最中に現われるモノのサマを示す修飾Ⅱ被修飾の関係構成の型を状況相修飾と呼び、動作・作用の結果に現われるモノのサマを示す結果相修飾と区別しておこう。この両者の違いは、被修飾成分の側——そこに含まれる動詞が、いわゆる「結果動詞」か否か——によって生じるのであり、相補的である。いずれも、動作・作用によって現われるモノのサマを表わすところから、二つをまとめて状態相修飾と名付けよう。

さて、結果相修飾、例えば「壁ヲ白ク塗ル」について、「壁白シ」と「壁ヲ塗ル」との和によって構成されるという見解がある。しか

し「白ク」と「塗ル」との間に因果関係が存することからすれば、これを単なる和とする見解は不適當であり、やはり「白ク」は「塗ル」を修飾限定するのだと解釈する方が良からう。これと同様に、状況相相修、例えば⑨もまた「夜明ケノ海ガ白イ」と「夜明ケノ海ガ輝ク」との和——「白ク」と「輝ク」との並列——ではなく、「輝ク」という動作・作用の生じている場において、「白ク」という情態が現われるのであり、やはり、因果関係が認められる。次の例を比較されたい。

⑪ a 白ク 輝ク 夜明ケノ海

b 白ク 輝ク 夜明ケノ海

c 輝ク 白イ 夜明ケノ海

d 白イ 輝ク 夜明ケノ海

⑪ a は「輝ク」ことによって「夜明ケノ海」に「白イ」という情態が付与されることが表わされるのに対し、⑪ b・d は、「白イ」という状態が「夜明ケノ海」に元々「輝ク」ということとは別に付与されていることが表わされるのである。

なお、「海ガ白ク見エル」や⑤の「昔ヲナツカシク思ウ」などは、因果関係が認め難い。しかし、モノの情態を示し、動作・作用の結果ではなく、動作・作用と同時の情態であることから、状況相修飾を含めておく。

さて、これに対し、①の「ユックリ」、③の「急ニ」、④の「ザアザア」など、山田の「從屬連用」にあたる情態修飾成分は、靜的なモノのサマではなく、動的な動作・作用そのものの行なわれ方——*mannere*——の様態——を表わす。このような関係構成の型を先の状態相修飾に対し、様態相修飾と名付ける。

情態修飾成分には、「赤ク」「アザヤカニ」など、専ら状態相修飾をなすものと、「ユックリ」「急ニ」など、専ら様態相修飾をなすものとのほか、⑫の「軽ク」のように、被修飾成分により、いずれにもなり得るものがある。⑬は状態相修飾ととられやすいが(a)、様態相修飾とも解釈し得る(b)のであり、この両義性もここに帰する。

⑫ a 帽子ヲ 軽ク 造ル (状態相修飾)

b 帽子ヲ 軽ク 打ツ (様態相修飾)

⑬ 彼ハ ソノ話ノ内容ヲ 簡單ニ マトメタ

a 非マトメラレテ話ノ内容ガ簡單ニナッタ (状態相修飾)

b 非彼ニトツテマトメルノハ簡單ダッタ (様態相修飾)

### 3、動作的概念の重層的把握

状態相修飾と様態相修飾との区別から、それぞれの修飾成分を状態相修飾成分・様態相修飾成分と呼ぶことにする。これが、はたして情態修飾成分の下位分類となり得るかを検討して行こう。

まず、両者が修飾対象として、動作的概念の異なる質を修飾限定しているのではないかということが推測される。様態相修飾成分は、動作的概念のうち、動態概念そのもの(これを象徴させると、アルコトヲスル)を修飾限定し、状態相修飾成分は、動作的概念のうち、モノのサマのあり方を修飾限定する。状態相修飾は、結果相修飾と状況相修飾とに分けられるのであるが、前者のモノのサマのあり方とは、モノのサマの変化(アルサマニナル)であり、後者は、モノのサマの発現(アルサマデイル・アル)である。

このように、動作的概念にみられる異なった質を「相」と呼び、

それぞれ、様態相・状態相と呼ぼう。状態相は、結果相である場合と状況相である場合とがある。

さて、①の「フクラム」の動作的概念には様態相と状態相とが具備されているのであるが、もし、両者が動作的概念の内て同等・同列であると仮定するならば様態相修飾成分「ユックリ」と状態相修飾成分「大キク」とは、被修飾成分「フクラム」に対して、やはり同等・同列に修飾限定するのだと考えざるを得ない。これを⑭に図示する。



被修飾成分に対する関係のしかたが同等・同列なものを二つに分けるとするのは、構文論の上で有効な分類とは言えないであろう。

しかし、ここに、両者を構文の上で区別しなければならぬと考えさせる、重大な差異がある。様態相修飾成分と状態相修飾成分とは、その出現順位(位置)に違いがあり、前者が後者に先行する傾向があるということである。例えば、先の①・③では、「大キクユックリフクラム」より「ユックリ大キクフクラム」の方が自然な順序であり、「赤ク急ニ点滅スル」より「急ニ赤ク点滅スル」の方が自然な順序であると思われる。さらに、両者が、目的格補充成分と共に起する場合、

⑮ a 彼ハ ヲックリ 大根ヲ 細カク キリキザンダ

b 彼ナラ 楽ニ ソノ話ノ内容ヲ ワカリヤスク マトメル

ダロウ

というように、Ⅱで示した状態相修飾成分は目的格補充成分の上位に、Ⅰで示した状態相修飾成分はその下位に位置することが多いのに対し、それを逆にした⑬ a bは、不自然な順序といわざるを得ないのである。

- ⑬ a 彼ハ 細カク 大根ヲ ャックリ キリキザンダ  
 彼ナラ ワカリヤスク ソノ話ノ内容ヲ 楽ニ マトメル

ダロウ

先に両義性を有するとした⑬が、状態相修飾にとられやすいというのも、「簡單ニ」が目的格補充成分の下位に位置することによる。次のように「簡單ニ」の位置を定め、他の位置に相当の修飾成分を補うと、両義性は失なわれる。

- ⑭ a 彼ハ 楽ニ ソノ話ノ内容ヲ 簡單ニ マトメタ (状態相修飾)

b 彼ハ 簡單ニ ソノ話ノ内容ヲ ワカリヤスク マトメタ

(状態相修飾)

c 彼ハ ソノ話ノ内容ヲ ワカリヤスク 簡單ニ マトメタ

(状態相修飾)

このような出現順位(位置)の違いから、その修飾対象である状態相と状態相についても、先の⑭の如き同等・同列の構成ではなく、次に示す重層的構成が考えられよう。

- ⑮ ャックリ 大キク 状態相 状態相  
 フクラム

別稿で詳しく論ずる予定であるが、このような「相」の重層的把握は、「シテイル」の意味と状態相修飾成分との関係を統一的に説明

するのに有効である。<sup>(10)</sup>

#### 4、状態相修飾成分の分類

前節でのべたように、状態相修飾の結果相修飾と状況相修飾とは、修飾内容の点では全く同じであり、ただ修飾対象である状態相が動作・作用の結果のモノのサマの変化を示す結果相であるか、動作・作用の最中のモノのサマの発現を示す状況相であるかによって区別されるのであった。したがって、状態相修飾成分の分類としては、状態相修飾成分をたてるだけでよい。

しかし、状態相修飾成分は、出現順位の面からも、状態相修飾における関係構成のあり方の面からも、さらに分類されねばならない。まず、その概略を示しておこう。

状態相修飾成分 {過程相修飾成分 動作相修飾成分  
 生起相修飾成分 進行相修飾成分}

状態相修飾成分は、動態の過程のあり方を修飾限定する「ユックリ」「速ク」「ザブリト」「ガタガタト」などの類と、過程と言うよりむしろ、事象(コト)の起こり方を修飾限定する「突然」「ニワカニ」「オモムロニ」「シバラクシテ」「ヒキツヅキ」などの類に分けることができる。前者は過程のサマを表わすことから、過程相修飾成分、後者はコトの生起のサマを表わすことから生起相修飾成分と名付ける。

この両者には次のような違いがある。まず一つには、一つの文に両者が共起する場合、生起相修飾成分が過程相修飾成分に先行する

傾向あるという、出現順位があげられる。

⑭ a 彼ハ 突然 ザブリト 水ニ トビコンダ

b イキナリ 速ク 走ルト 脇腹が イタクナルヨ

⑮ a 彼ハ ザブリト 突然 水ニ トビコンダ

b 速ク イキナリ 走ルト 脇腹が イタクナルヨ

Ⅱ線で示した生起相修飾成分がⅠ線で示した過程相修飾成分より先行する⑭の文の方が、その逆の順序である⑮より自然である。

次に、被修飾成分が「シハジメル」「シダス」などの形となった場合、両者には、関係構成のあり方の差が、修飾の興行の違いとなつて現われる。

⑯ 彼ハ イキナリ 速ク 走りハジメタ

この文は、「速ク走ル」コトを「イキナリ」開始したという意を表わし、「走ル」コトヲ「イキナリ速ク」開始したとか、「イキナリ速ク走ル」コトを開始したとかいう意は表わさない。つまり、「速ク」が「走りハジメル」の「走り」を修飾限定し、「イキナリ」が「ハジメル」を修飾限定するといった修飾の興行の差である。

このことは次のように解釈される。動作的概念の様態相は、動態の過程を示す過程相と事象「コト」の生起を示す生起相とによって構成されていると考えられる。⑯bでみたように、「走ル」はそれ自体に過程相と生起相とが具備されている。ところで、「ハジメル」という補助動詞は、上接動詞の具備する生起相を、「開始」という側面から特示する働きをすると考えられる。したがって、「走りハジメル」においては、「走ル」の生起相は「ハジメル」によって「開始」の側面から特示されているのであり、「突然(速ク)走ル」コトを開始したといったように「走り」に生起相を想定する解釈や、

「走ル」コトを(突然)速ク開始したといった「ハジメル」に過程相を想定する解釈は成立し得ないのである。

以上のことから、先の⑭にならって、生起相修飾と過程相修飾とを次のように図示する。

⑳ a 走ル

突然 ↓ 過程相 生起相

b 走リ ハジメル

突然 ↓ 過程相 生起相

さて、「少シズツ」や「シダイニ」「マスマス」なども過程にかかわる修飾限定をなすと思われるが、これらは「ユックリ」「速ク」「ザブリト」などとは区別されるべきものと考えられる。なぜならば、次の㉑に示すように生起相修飾成分の下位に位置し、「アガリハジメル」に対しても、「少シズツアガル」コトが「突然」開始されるといった関係構成となる点は、㉑の「速ク」と同様であるが、「マスマス速ク走ル」「シダイニユックリ回ル」というように、両者が共起する際は、「マスマス」「シダイニ」の方が先行するのである。

㉑ a A社ノ株ハ 突然 少シズツ アガリハジメタ

b A社ノ株ハ ヒキツツキ ジョジョニ アガリハジメタ

㉒ a 列車ハ マスマス 速ク 走ツタ

b 齒車ハ シダイニ ユックリ 回ツタ

「シダイニ」「ジョジョニ」「マスマス」「少シズツ」などは、すでに石神照雄(一九七八)や新川忠(一九七九)によって、「進行」

にかかわるものとして注目されている。本稿でもこれらを進行相修飾成分と呼び、「ユックリ」「速ク」などと区別する。「速ク」「ユックリ」や「ザブリト」などは、動きそのもののサマを表わすので、動作相修飾成分と呼ぶ。

進行相修飾成分は、単に動きの時間的進行の度合を表わすばかりでなく、程度の大きい方への進行の度合も表わすことがある。例えば、

㉔ a A社ノ株ガ 少シズツ アガツタ

b ギブスガハズレルト、彼ハ ジョジョニ 歩キハジメタ

のように、単独で被修飾成分を修飾限定するときは、主として「株価ノアガリ量」なり「歩ク距離（又は時間）量」なりの「量」の側面から、その程度の大きい方への進行の度合を示す。また、先の㉔ aや、次の㉔の例のように動作相修飾成分や状態相修飾成分と共にすると、「ヨリ速イ方」「ヨリ赤イ方」といったその修飾内容の程度の大きい方への進行の度合を示す。

㉔ 溶液ハ マスマス 赤ク 変化シタ

これは、「シダイニ」「ジョジョニ」「マスマス」「少シズツ」の順に、時間的進行から程度の進行を表わす傾向が強くなるようである。㉔ bや㉔では、程度の進行の意は弱いといえるだろう。

㉔ 溶液ハ シダイニ 赤ク 変化シタ

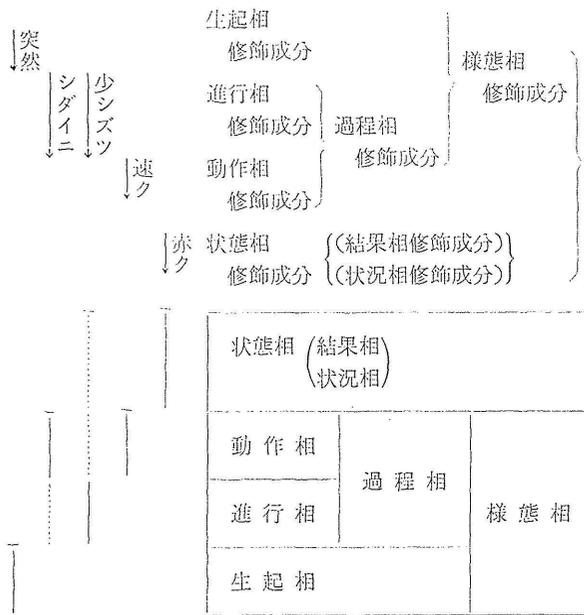
程度の進行の強い「少シズツ」は、㉔ aのように「突然」「ニワカニ」と共起し得るが、時間的進行の強い「シダイニ」「ジョジョニ」はこれらと共に起しがたいようである。

㉔ a?? A社ノ株ガ 突然 シダイニ アガリハジメタ

b? A社ノ株ガ 突然 ジョジョニ アガリハジメタ

「シダイニ」「ジョジョニ」は、「三時ニ」の如く、時点を示すものとは共起し得ず、一方では、生起相修飾成分でも「ヒキツヅキ」「シバラクシテ」など、生起の時点を明確に示さないものとは共起し得る。ここから、時間的進行の強いものは、生起相に対して、その生起が一時点に定まらないこと、という制約を加えるのだと考えられる。

以上、あげてきた情態修飾成分の種類及び「相」の重層との呼応をまとめて示そう。



## 5、頻度及び度数の修飾成分

生起相修飾成分の上位には、「ヨク」「シバシバ」「タビタビ」などの「頻度の修飾成分」が位置しうる。これは事象の存在(コトガアル)を修飾限定するもので、

㉔ a 彼ハ シバシバ 突然 セキコンダ

b タビタビ 彼ノ家デ パーティーガ アツタ

のように、「突然セキコム」「彼ノ家デパーティーガアル」といった事象の存在の頻度を表わす。これは、存在相修飾成分と呼ぶことができる。

「頻度の修飾成分」と同様のものに、「三回」「何回モ」「幾度モ」など、回数を表わす「度数の修飾成分」がある。これも㉔ aのように生起相修飾成分の上位に位置し得るが、一方、㉔ bのようにその下位にも出現し得る。

㉔ a 彼ハ 何回モ 突然 セキコンダ

b 彼ハ 突然 何回モ セキコンダ

しかし、㉔ aと㉔ bとは、関係構成の上で違いがあり、㉔ aでは「突然セキコム」コトが「何回モ」存在したというように、「何回モ」は事象の存在の回数を表わすが、㉔ bでは、「何回モセキコム」コトが「突然」起こったというように、「何回モ」は「セキコム」という動きの過程を回数の面から表わしたものと考えられる。後者の場合、

㉔ 彼ハ 突然 何回モ ユックリト 子供ノ頭ヲ ナデタ

といった例のように「何回モ」の下に動作相修飾成分を入れることができるのであり、「ユックリナデル」という動きが、連続して進

行する過程を、回数<sup>②</sup>の面から表わしたものと考えられる。「頻度の修飾成分」の場合、㉔ bにあたる用法はみられない。

㉔?? 彼ハ 突然 シバシバ セキコンダ

したがって、「度数の修飾成分」は、生起相修飾成分の上位に位置する場合、「頻度の修飾成分」と同じく、存在相修飾成分となるが、その下位に位置する場合は、進行相修飾成分となるのだと考えられる。

## 6、残された問題

以上、情態修飾成分の範囲と考えられる成分の分類の試案を示したが、なお何点か残された問題がある。一つは、一つの動詞には、ここであげた「相」が必ずしもすべて具備されているわけではないことである。例えば、「聳エル」や「アル」には様態相が欠落しており、「一瞥スル」には進行相が欠落していると考えられる。被修飾成分論として、この面からの動詞の分類が提示されねばならない。

また、動作主体が複数の場合、

㉔ 政治名柄が 次々ト 突然 アガリハジメタ

のように「突然アガリハジメタ」コトが「次々ト」生じたといった、生起(開始)の連続生起を表わす表現が可能である。これについても、紙面の制約上、触れられなかった。

そして、最も重要なのが、この分類及び「相」の重層的把握が、情態修飾関係以外にいかに応用し得るか、という点である。

これらについては、別稿に譲ることにする。

- (1) 北原(一九八一) p.230  
 (2) 山田(一九〇八) p.883—p.905  
 (3) 渡辺(一九七一)・芳賀(一九五四)・大久保(一九六八)等参照。  
 「限定副詞」に関しては、渡辺(一九七二)の他、工藤(一九七七)参照。  
 (4) 新川忠(一九七九)も「質規定的なむすびつき」「結果規定的なむすびつき」との二つを区別している。むろん、これらは、類の設定が相似であるにとどまり、個々の情態修飾成分がいずれに所属するかについては異同がみられる。  
 (5) 山田(一九〇八) p.1019—p.1039参照。  
 (6) 状況相修飾は、動作・作用の未完了時のモノのサマ、結果相修飾は完了時のモノのサマに関する関係構成の型であるとも言ひ換えることができよう。  
 (7) ② a b は山田(一九三六) p.84にあげられた例である。  
 (8) このアルは存在のアルとは別と考える。(13)参照。  
 (9) ⑦ c では「ワカリヤスク」と「簡單ニ」とが目的格補充成分の下位に位置し、いずれも状態相修飾成分となる。この場合、両者は同等・同列に「マトメル」を修飾限定すると考えられる。  
 (10) 概略を述べるに、様態相は後述の如く生起相と過程相とに分けられるが、この二つと結果相とは、それぞれ「シテイル」の経験・動作進行・結果残存の意味と対応すると考えられる。そして、文における「シテイル」の意味は、この「相」の最も下位に発現したものであると定まるといった原則を設定し得る。例えば、「フクラム」はこの三つの相を具備するが、文脈・場面により生起相・過程相が発現しない限り、「大キクフクランデル」は「大キク」により発現した結果相に従い、結果残存となる。ところが「ユックリ大キクフクランデル」では、結果相より下位の過程相が「ユックリ」によ

り発現するため動作進行となる。また、「突然」は最も下位の生起相を発現させる。「突然ユックリフクランデル」という文が動作進行の意味とはなり得ず、「コノ前見タトキモ、突然ユックリフクランデル」といった経験を表わす場合にのみ用いられるのは、この生起相の発現によると考えられる。

(11) このことに関し「瞬間性」といったものを想定することができよう。時間的進行が強くなるほど「非瞬間性」を条件とし「瞬間性」の動作相修飾成分「ザブリト」「ガブリト」などと共起し得なくなる。(10)でふれた「シテイル」の動作進行の意も「非瞬間性」を条件とするのであり、「ガブリト」によって過程相が発現しても、「ガブリト飲ンデル」は動作進行の意とはなり得ない。「非瞬間性」の「ガブガブト」では、動作進行の意となり得る。

(12) 図中、「少シズ」「シダイニ」の破線は、それぞれ程度の進行と生起相への制限を示したものである。

(13) 物の存在を示すアルとは別。本稿では、状態のアル(アルサマデア)、事象の存在のアル(アルコトガアル…場所の「ーデ」と共起し得る)、物の存在のアル(アルモノガアル…場所の「ーニ」と共起し得る)の三種を区別する。

#### 参考文献

- 石神 照雄(一九七八)『時の修飾成分』『文芸研究』第88集  
 大久保忠利(一九六八)『日本文法陳述論』明治書院  
 北原 保雄(一九八一)『日本語助動詞の研究』大修館書店  
 工藤 浩(一九七七)『限定副詞の機能』松村明教授 選勝記念 国語学と国

語史 明治書院

新川 忠(一九七九)『副詞と動詞とのくみあわせ』試論

『言語の研究』むぎ書房

鈴木 泰（一九八〇）「情態副詞の性質についての小見」『山形

大学紀要（人文科学）』9・3

芳賀 綴（一九五四）「『陳述』とは何とは何もの？」『国語国

文』昭29・4月号

橋本 四郎（一九七五）「修飾―連用と連体―」『日本語と日本語

教育―文法編―』文化庁

山田 孝雄（一九〇八）『日本文法論』宝文館書店

（一九三六）『日本文法概論』宝文館書店

渡辺 実（一九七二）『国語構文論』塙書房

追記 本稿は国語学会昭和58年春季大会で口頭発表した内容に手を加えたものである。席上、鈴木泰氏、石神照雄氏、坂口頼孝氏より御教示いただいた。また、北原保雄先生には、成稿後、一読願ひ、数々の御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。